雑学書庫 知識の記録

貧困を村が引き受ける、エリザベス救貧法（Elizabethan Poor Law）

記事のURL

https://www.gklibrarykor.com/ja/article/10488/

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

イギリスの歴史ドラマを見ると、村の教会の前に貧しい人々が集まってパンを分けてもらう場面がよく出てきます。そのパンは誰かの善意だけで用意されたものではなく、村の住民が法に従って納めた税で用意されたものでした。 この制度の出発点こそが「エリザベス救貧法（Elizabethan Poor Law）」です。エリザベス救貧法とは、1601年にイングランド議会が定めた法律で、貧しい人を助けることを教会の慈善だけに任せず、各教区が税を集めて責任を負うよう定めた制度を意味します。 本記事では、エリザベス救貧法が生まれた背景と主な内容、貧しい人を分けて助けた方法、そしてこの法律が残した限界と今日の社会福祉に与えた影響までを順に見ていきます。 貧困を共同体の責任と定めた最初の法律 エリザベス救貧法が生まれた背景 エリザベス救貧法はある日突然つくられた法律ではなく、100年近くにわたって積み重なった社会の変化への答えでした。 (1) 修道院が消えた後の空白中世のイングランドで貧しい人の世話をするのは、主に修道院と教会の役目でした。ところが1530年代後半にヘンリー8世（Henry VIII）が修道院を解散したことで、飢えた人々が頼れる場所は大きく減ってしまいました。 (2) 土地を失ってさまよう人々同じ頃、羊毛産業が大きくなるにつれて、地主が農地を柵で囲って羊を飼う囲い込み（Enclosure）が広がり